ASTRO2022(第 64 回北米放射線腫瘍学会)体験記

岐阜大学放射線科　森貴之

I.　はじめに

今回、岐阜大学医学部附属病院国際医療センターによる国際学会参加支援事業プログラムからご支援いただき、2022 年 10 月 23 日から 2022 年 10 月 26 日にかけての 4 日間、アメリカ合衆国テキサス州、サンアントニオで行われた ASTRO（American Society for Radiation Oncology）annual meeting 2022(第 64 回北米放射線腫瘍学会)に参加してきました。これは放射線腫瘍医にとって最も大きな国際学会のひとつであり、私にとっては初めての海外学会参加でもあったため非常に貴重な経験となりました。体験記としてここにご報告します。（Fig.1）

II.　学会の会場・雰囲気

アメリカ合衆国のテキサス州、サンアントニオ（Henry B. Gonzalez Convention Center）が会場でした。日本からは飛行機でおよそ 14 時間、時差は日本からマイナス 15 時間です。気候については 10 月末にも関わらず日中で 30 度前後と暑く、半袖の T シャツで過ごす人が目立ちました。

現地の参加証には、緑・黄色・赤の紐がつけられており、ボディコンタクトを許すレベルを自分で選択することができ、一目でわかるようになっていました。緑はフリー、黄色は会話やハンドシェイクのみ、赤はコミュニケーションをできるだけ避けたいといった内容でした。COVID19 が少し落ち着きつつあった時期でしたが、各国からの参加者に対する最大限の配慮だと感心しました。

学会会場については、日本と比べて機器展示会場・講演会場をはじめとした全ての規模が一回り以上大きかったです。会場のライティングや BGM が派手でしたが、一度セッションが始まるとその雰囲気のまま引き締まった講演が始まることに非常に驚き、初日は呆気にとられてしまいました。(Fig2.3)

服装についてはもう少しラフなイメージを抱いていましたが、スーツでピシッとした参加者が大半でした。サンアントニオ全体がリゾート地であり、学会期間中の街中では名札を付けていなくても格好からおそらく参加者であろうと予想できるほどの服装の引き締まり具合のギャップが面白かったです。コーヒーや軽食を片手に講演を聞く姿も目立ち、最終日前日の夜にはカクテルタイムがあるなど全体として非常にオープンな雰

囲気がありました。また演者に対して質問をするや否やマイクの前からいなくなってしまうなど、日本の学会では見たことのない光景も目にしました。

オーラルでの発表や、ポスター発表については活発に議論・質問が行われていました。まだ治療法が確立していない疾患や改善の余地のある分野に関しては、エキスパートの意見や会場の意見を集計するなどライブ感のあるディスカッションが新鮮で非常に勉強になりました。また、質問者や発表者が日常の臨床で参考にしていた論文の著者であったり、臨床試験の責任者であったりと臨床や研究の最前線を垣間見ることができ興奮したのを覚えています。学会への現地参加の重要性を改めて感じました。

ところで、サンアントニオで観光といえば一番有名なのはリバーウォークでしょうか。市内を横断するように流れる川にはのんびりと遊覧船が行き来し、両岸には飲食店が賑わっていました。会場やホテルからもすぐにアクセスすることができ、セッションの合間の散歩に最適でした。死者の日が近かったこともあり、街中は極彩色のドクロが飾られどこか中南米の風を感じるノスタルジックな時間を過ごすことができました。(Fig.4)

III. 聴講を通して感じたこと

本大会のテーマは「Artificial Intelligence (AI) and Emotional Intelligence (EI): Caring for the Patient in a Wireless World」であり、AI をはじめとした放射線治療分野の目覚ましい技術的発展の側面はもちろん、患者との信頼関係や全人間的なケアを大切にするといった根源的な医療の側面にも今一度目を向け、そのバランスを保ちながら診療していく姿勢がこれからの時代には望まれるといった内容が大会期間を通して多くの演者によって語られていました。カルチャーショックだったのが治療における人種差別・バイアスに対する講演が数多くなされていたことです。日本での発表には無いほどの講演者から溢れ出る熱量に圧倒されると共に、これからの国際社会において避けて通れない内容であると改めて実感しました。また Plenary session では、免疫チェックポイント阻害薬を併用した放射線治療のレジメンについての臨床試験の報告が数多くなされていました。最近の日常診療で併用時の放射線治療について聞かれる機会が多くなってきており、気になっていた分野の一つです。世界中で疑問を持って臨床試験を動かす人々を間近で見て、日々の症例へのモチベーションが高まった瞬間でした。

Ⅳ. ポスター発表

現在、私は放射線の飛跡・線量の可視化をテーマに大学院で研究を行っており、「Development of Highly Sensitive and Stable Nitroxyl Probe for Visualization of Free Radical Reaction Induced by X-Ray Irradiation」という演題名で今回ポスター発表を行いました。会場にはデジタルポスターが閲覧できる端末が 30 台弱設置され、セッションの時間になると割り当てられた発表者たちが集まり各々でセッションを進めていくといった流れでした。また割り当てられた時間外でも自分のポスターを開いていると、話しかけてきてくれる参加者も多く、私の拙い英語の説明にも真剣に聴いてくれる人ばかりでした。もちろん今後の課題や厳しいご指摘もありましたが、この内容の続きが見たいと言われたことは私にとって今後の研究へのモチベーションにつながりました。現地でのディスカッションを機に自分の考え方や視野の広がりを感じることができ、有意義な経験となりました。(Fig.5)

Ⅴ. おわりに

COVID19 の影響で減っていた現地での参加者が少しずつ戻ってきた今大会では、演者の”The idea is that coming to the meeting isn’t just about the education and the science… it’s about an experience.” という言葉が胸に残りました。まさに COVID19 が猛威をふるい始めた年にレジデントとなった私にとって、国際学会に現地で参加できた喜びはひとしおでした。数多くの講演に参加し知識がついただけではなく、現地で Dr たちとコミュニケーションがとれたことは貴重な“経験”として人生の糧になると感じています。臨床・研究ともにまだまだ駆け出しですが、いつかは緊張せず国際学会の舞台に立てる日がくることを夢見ながら、日々努力していきたいと思います。

最後に、国際学会での発表機会を与えてくださり、研究内容の相談から発表準備に至るまでご指導いただいた岐阜大学放射線科　松尾政之先生、岐阜大学高等研究院兵藤文紀先生、学会参加の助成をしてくださった岐阜大学医学部附属病院国際医療センター長の矢部大介先生をはじめとして、お力添えいただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

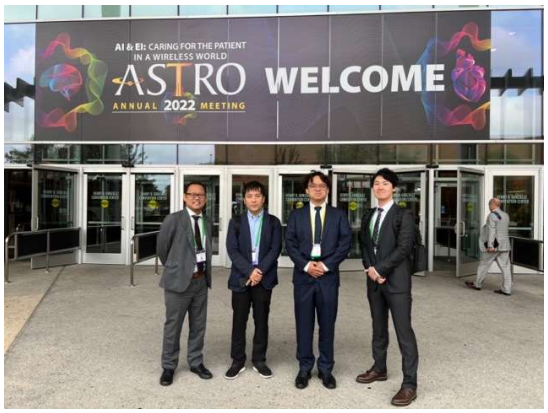

Fig.1） 会場のメインエントランス前にて

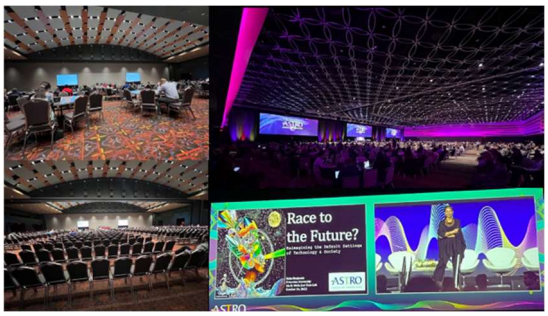

Fig.2） 講演会場の雰囲気

Fig.3） 企業ブースの雰囲気

Fig.4） 学会会場周辺の景色

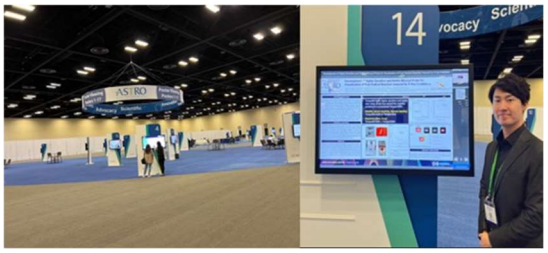

Fig.5）ポスター会場と筆者